

第27回学習会を、平成23年2月18日(金)19:00～20:00福岡市教育センターにて行いましたので報告いたします。

## 第27回目の内容

講師 重枝一郎先生(福岡市教育センター主任指導主事)

- 1 つながり学習
- 2 体験活動  
協力体験「バンガロー殺人事件」(ピアサポート)
- 3 実践交流(東光中学校 永光先生「風土会で学んだことを活かした学級活動」)



今、学校や教師に求められているのは、「異質をつなぐ力」



異質なもののどおしの境界に  
新しい教育を開く活力の源がある！！

学校と社会 (職場体験等)   教室と家庭 (学級だより)   教科と教科 (教科の壁)   学校と学校 (小中連携)   教師と教師 (同僚性)   子どもと子ども 「つながり学習」

「つなぐ」ためには、心理的な壁をこえて近づかなければならない  
新たな出会いを求めて扉をたたき、知恵を学ばなければならない



子どもの育つ姿を見て、喜び合える関係づくりが大切

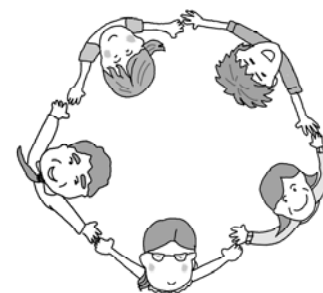
## ◎つながり学習

### 1. 「つながり学習」のビジョン

- ① 教師同士、教師と子どもの目標共有
- ② その発信力
- ③ P D S A

### 2. つながるための3要素

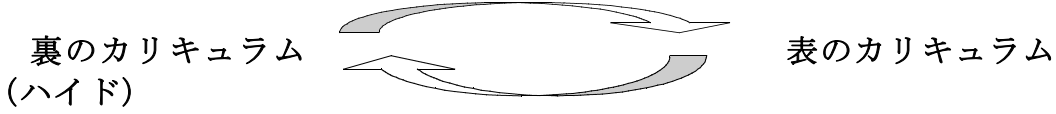
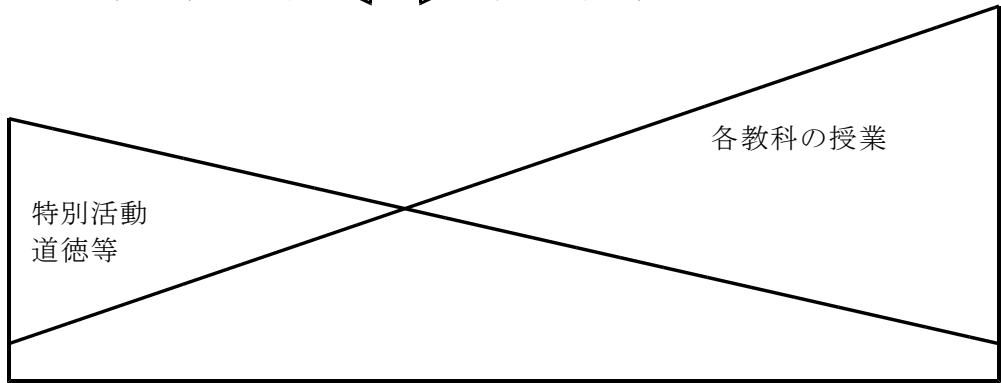
- ① 安心感 (ルール)
- ② 楽しい体験 (プラスの变身)
- ③ 認められる体験 (自己効力感)



※大切なのは、教師自身が「つながる言葉」を日常的に使っていくこと

### 3. 教科指導の中で行う「つながり学習」

(1) つなげる場 (インプット ↔ アウトプット)



(2) 脱一斉指導

1 単位時間に、ほとんどの子どもに意味のある発言をさせられるか

↓  
 発言した子どもは、質問や賛成・反対意見を通して、他者とかわるが、それ以外は、自分の口と言葉で表出していない。

(例) **ペア学習**

- ①自分の考えをつくる・書く
- ②聴くスキルを発揮させ、交流させる
- ③時間いっぱい話す

[ 繰り返し OK  
質問 OK ]

⇒ 指名し、「ペア相手の〇〇さんはどんなことを言いましたか？」

↓

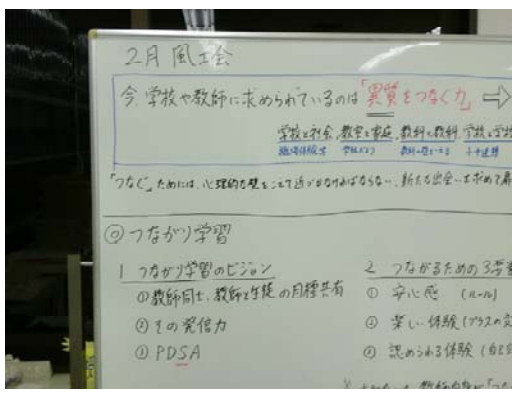
再現できるように、しっかり聴くようになる

↓

信頼・つながり

(3) 授業にチーム体験  
 拡散のチーム活動 → 収束 → 創造

(4) つながりの本質  
 かかわらせればつながるか? × → 相手意識を強くもたせるルール確立



解説

◎テーマは、「筋を通した実践」(実践家にこだわる重枝流)

重枝先生は言います。「教育に今、求められていることは何か、子どもの実態を把握し、日々の実践をしながら、自分なりに定義付けています。そうすると、一本筋が通った実践を重ねることができるのです。そして、今、一番感じていることは、異質なものの境界に、新しい教育を開く活力の源があるということです。これは、自分の実践から実感していることです。これからの教師には、『異質をつなぐ力』が必要ですし、その発想がいます」と

具体的には、「学校と社会」「学校と家庭」「異校種」をつなぐこと。

「教科と教科：中学校では教科担任制なので、教科の壁を越えるという発想。

教室と教室：小学校なら、教室の壁を取っ払うという発想」

「教師と教師：バラバラな教師集団で仕事をするのはつらいものがあります。教師の協働性という意味です」

「子どもと子ども：家庭環境や価値観、性格等、多種多様な子どもがいます。異質とかかわる意義を理解させて、つなぐことです」

異質をつなぐためには、心理的な壁 を越えて、近づかなければなりません。



ネガティブにならずに、新たな出会いを求めて、子どもたちが近づこうとするためには、教師の働きかけが必要です。

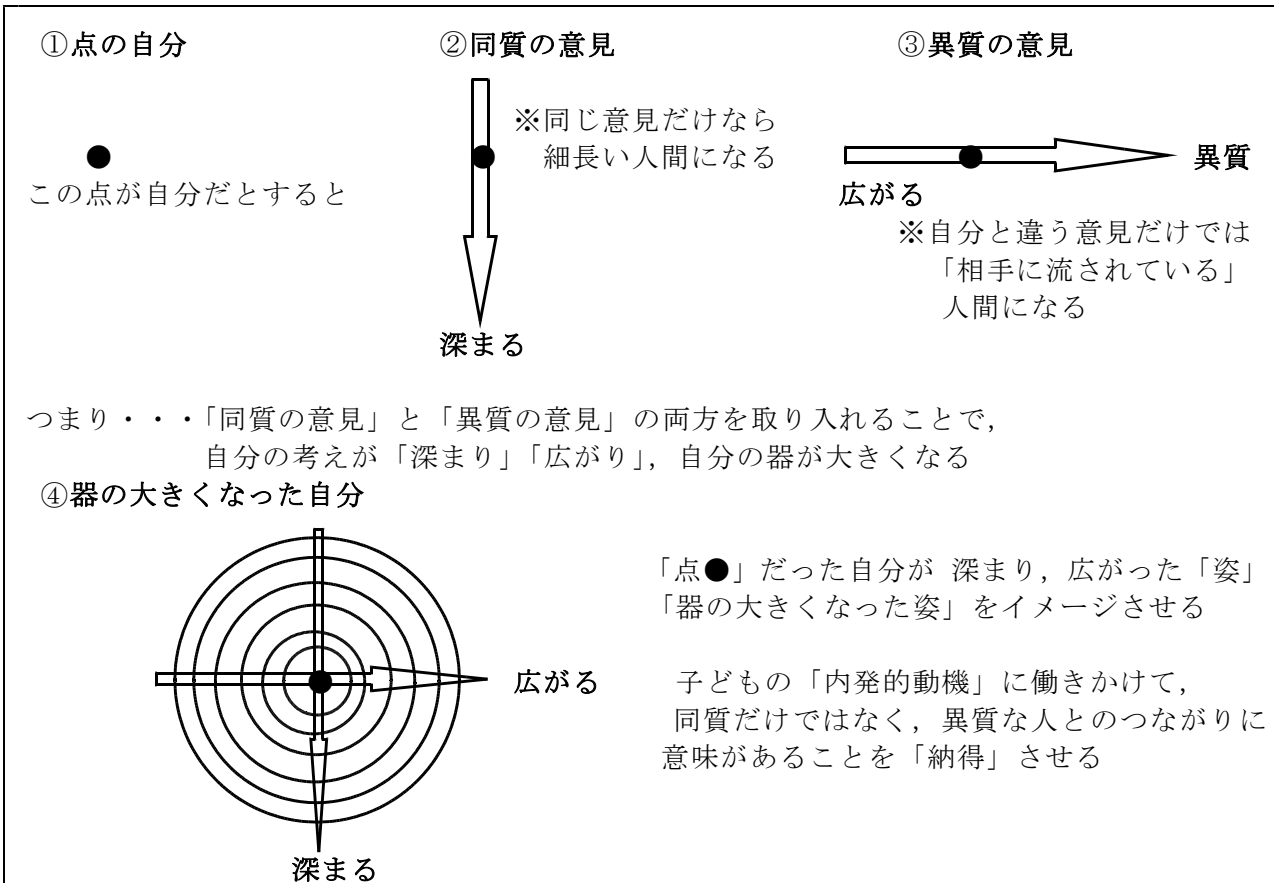
異質とつながるよさや意義を、教師が発信します。

子どもたちが腑に落ちるような表現で行います。



子どもたちは、異質とつながることで成長し、器が大きくなります。

子どもたちが育つ姿を見て、みんなで喜び合おうという発想で、継続的に取り組みます。





## ◎「PDCA」・・・→「PDSA」

PDCA サイクル（ピーディーシーエー ・ PDCA cycle ・ plan-do-check-act cycle）は、S.40 年頃、アメリカから入ってきた手法で、大量生産において品質やスピードの管理を円滑に進め、経営の合理化をねらっています。

Plan（計画）→ Do（実行）→ Check（評価）→ Act（改善）の 4 段階を繰り返すことによって、業務を継続的に改善します。

1.Plan（計画）：従来の実績や将来の予測などをもとにして業務計画を作成する

2.Do（実施・実行）：計画に沿って業務を行う

3.Check（点検・評価）：業務の実施が計画に沿っているかどうかを確認する

4.Act（処置・改善）：実施が計画に沿っていない部分を調べて処置をする

この 4 段階を順次行って 1 周したら、最後の Act を次の PDCA サイクルにつなげ、螺旋を描くように 1 周ごとにサイクルを向上（スパイラルアップ、spiral up）させて、継続的に業務改善します。

学校は企業とは違います。経営の合理化をねらった「PDCA サイクル」の「C」を「S」＝スタディ（学習する）にする方が、学校には合っているかもしれません。

「P」＝ビジョンをもって具体的なプランをたてた後に、「D」＝実践してみる。学校では、教師も子どもも、「実践」することが大事です。そして、してみた後に、「S」＝「学ぶ」。学習して、もう一回、「A」＝改善して実践する。このようなやり方もあるという、柔軟な発想で、チャレンジしていきます。

## ◎実践したら、総括する。それを教室や家庭に「発信」

→「子どもの育つ姿を見て、みんなで喜び合う」が可能になる



まずは、「どんな学級になってほしいか」「どんな人間になってほしいか」という、教師の願いや親御さんの思いを「発信」します。そのビジョンをもって、さまざまな実践を行い、スパイラルアップさせていった結果、子どもたちに、どのような変化や成長があったのか、また、課題は何なのか。年度末に必ず「総括」し、それを子どもたちや家庭に「発信」します。それを中学校では 3 年間、小学校では 6 年間、継続的に積み上げていくことで、教師集団・子ども・保護者の目標共有ができるのです。また、「子どもの育つ姿を見て、みんなで喜び合う」が可能になるのです。

## ◎大切なのは、教師自身が「つながる言葉」を日常的に使っていくこと

例えば・・・「先生、ちゃんと見てるから」

「何かあったら、必ず先生に言えよ。必ず、何とかするから」

このような教師の言葉は、子どもに「安心感」をもたせることができます。

学校生活に「安心感」がないと、子どもも親御さんも、学校に行くこと（行かせること）が「不安」になります。精神的に追い込まれると、生徒指導上の問題に発展していきます。

後手後手にまわる生徒指導ではなく、「予防・開発的な生徒指導」が必要なのです。

まず教師は、学校や教室に「安心感」をつくるためにも「ルールの確立」を行います。アウトールールを定着させると同時に、インナールールを育むのです。

※アウトールール：心の外の外的な世界にあるルール      インナールール：心の中の内面的なルール

アウトールールは集団生活の規律と置き換えられます。アウトールールに対して、押しつけられた強制的なものだという感覚が強いと、人は逸脱、反発しようとしています。ところが、インナールールが育っていると、例えば、先生の話や聞き、友だちを信頼しようなどの気持ちが心のルールとしてあると、アウトールールを不快感のないものとして受容し、ルールが確立されます。

そのために、教師自身が「つながる言葉」を日常的に使うのです。

「ありがとう」「先生、助かったよ」「それが〇〇のいいところだね。先生も感動した」

教師は、子どもが「自己効力感」を感じられるような、認める言葉を日常的に使います。

まずは、教師が率先して「ありがとう」を言うのです。

学校や教室に「ありがとう」という言葉が、満ちあふれるように。日常的にあたりまえに、教師が子どもに、子ども同士でも「ありがとう」と言い合えるように。

## ◎一日の大半は授業・・・授業の中で「つながる時間」を設定する

授業は「表のカリキュラム」です。そして、規律や人間関係について学ぶことは「裏のカリキュラム（隠れたカリキュラム・ハイドカリキュラム）」です。両方がリンクしています。学校では、両方を学んでいます。

そのことを、教師は子どもや保護者に「発信」し、強く「意識」させます。学校に来て、集団生活の中で学んでいるのは、人間形成に集団が欠かせないからです。教師自身も、そのことを「意識」して、教育活動を行います。

教師自身に、授業を通して、学習規律や良好な人間関係づくりを行おうという「意識」があれば、自分の授業のあり方を見直すことができます。



## ◎脱・一斉指導

一斉指導という形態で、本当に子どもたち全員が授業内容を理解できているのでしょうか？

例えば・・・「ペア学習」や「チーム体験」をうまく取り入れることで、子ども一人一人が主体的に授業に参加し、理解が深まったり、認められる体験から信頼が生まれ、つながりが生まれたりします。

「ペア学習」も「チーム体験」も、最初からうまくはできませんが、積み重ねることで、ルールを守って取り組むようになります。そのように、教師が意図的に育てるのです。

ペア学習の場合は、指名したときに、自分の考えではなく、ペア相手が何を言っていたか、どんな考えをしていたかを発表させます。そうすることで、相手の話を再現できるように、しっかり聴くようになります。この活動を通して、自分の考えに、人の意見がプラスアルファされます。

「チーム体験」ではまず、ブレインストーミングで、できるだけたくさんの意見を出し合います。それを、KJ法でカテゴリーに分類します。最後は、カテゴリーで分けたものにキャッチフレーズをつけるなどして、整理します。このようなチーム活動を通して、子ども同士で意見を出し合ったり、創造したりという体験を仕組むのです。それぞれの子どもの活躍の場があるように、工夫します。

## ◎相手意識を強くもたせる「場」の設定

子ども同士を「つなぐ」ためには、相手意識を強くもたせる必要があります。それがないと、つながりません。教師は、ただ形だけ「ペア学習」や「チーム体験」をさせるのではなく、意図的に工夫して、「場」を創る働きかけを行います。教師側の意図や働きかけが重要なのです。

「異質をつなぐ」ための「場」や「活動内容」を教師が創造することで、新しい教育を開くことができるのです。

## ◎レジリエンス（＝困難な状況にもかかわらず、うまく適応できる力）

子どもの心が忍耐強くなり、弾力性、柔軟性をもつためには、周りとの関係や環境によるところが大きいというデータ結果があります。子どもが、しなやかで強い、折れない心をもつためには、誰かとかかわりや励ましが必要なのです。忍耐強さは、本人のパーソナリティーの問題にするのではなく、その人の周りの人的なものを含む環境などからアプローチすることができます。レジリエンスは、歯を食いしばって一人で耐えることでは、育たないのです。

人は、成功したり、努力して何かを成し遂げたりしたときが、他者への感謝をおぼえる瞬間です。「みんなのおかげです」「周りの人のおかげです」という気持ちが湧いてきたとき人は、人間としての根が深くなり、成長できるのです。

ここに、学校の存在意義があります。学校には、感謝の気持ちをもてるチャンスがたくさんあります。

**「自力による成果を得た瞬間は、他力に気づく瞬間である」**

人は、人とかかわりのなかで、「おかげさま」「ありがとう」という感謝の気持ちや、レジリエンス等を育むことができます。

# 成功物語

題 名

年 組 番 名前

★いつごろ

★どんなことができるようになったか

☆どんな方法で？

☆だれかに手伝ってもらった？

☆できるようになるまでどのくらいかかった？

☆なかなかできなかつたときの気持ちは？

☆がんばっているときの気持ちは？

☆できるようになったときの気持ちは？

☆みんなに伝えたいことは？

☆成功したときのまわりの人の反応は？

※ねらい

①自己理解②他者理解③自己肯定感（自分自身の価値に対する感覚）④自己効力感（目標に到達する能力に対する自分の感覚）⑤レジリエンス（忍耐強さは本人のパーソナリティのみに関連するのではなく、その人の周りの人的なものを含む環境などからのアプローチが大きい）

この①から⑤のどれかにフォーカスして振り返るのもよし、総合的に振り返るのもよし。

## 「バンガロー殺人事件」

この活動は、お互いに協力し合って問題解決をすることで、他者を理解することを目的としています。グループで問題を解決することで、協力とはどういうものかを体験できます。また、協力するためには、情報を正確に伝えること、友だちの良いところを認め合うことが大切だということがわかります。

人数は1グループ6人程度で、大人数でも可能です。

3月などの学年のまとめの時期に、集大成として行うことができる活動です。体育館で、学年全員や異学年混合で行うこともできます。

### (準備)

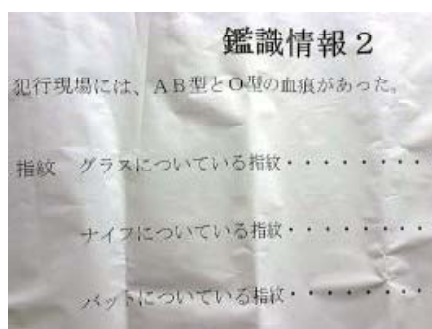
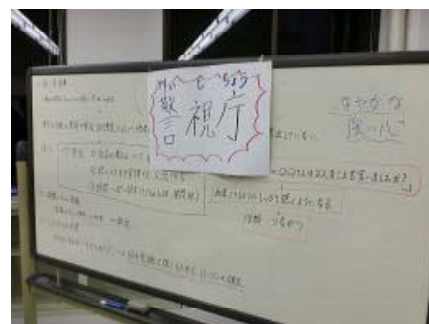
ゲームで用いるカード

- ・グループへの指示書1 各班1枚
- ・グループへの指示書2 各班1枚
- ・役割カード 各班1セット(6枚)
- ・情報カード 各班1セット(30枚)
- ・解答用紙 各班1枚
- ・鑑識情報1 1枚
- ・鑑識情報2 1枚
- ・殺人現場の情報 1枚
- ・聞き込み情報 各班1枚
- ・鑑識情報スペシャル 各班1枚
- ・ふりかえり用紙 各自1枚

筆記用具, メモ用紙

### (展開)

- ① 教室内や廊下, 体育館等の3カ所に、「警視庁」「殺人現場」「鑑識」を設置しておく。「警視庁」には「鑑識情報1」を, 「鑑識」には「鑑識情報2」を, 「殺人現場」には, 「殺人現場の情報」を貼っておく。
- ② 6人グループをつくる。「役割カード」を引き, 役割を決める。1人で複数枚もてば, 4~5人でも可能。
- ③ 各班に「グループへの指示書1」を配る。
- ④ 各班に「グループへの指示書2」を配る。グループで課題を解決すること(真犯人を見つけること)が目的だということを確認する。
- ⑤ 各班に「情報カード」を1セットずつ配る。  
カードは裏側にして, トランプのように各自に均等に配る。(1人あたり5枚)。  
この「情報カード」は, 他の人に見せてはいけないことを伝える。
- ⑥ 各班に「解答用紙」を配り, ゲームを始める。





- ⑦「聞き込み情報」を得るための課題、「鑑識情報スペシャル」を得るための課題を「警視庁」に出させる。(※警視庁に教師がいるようにしておく)  
正解した班にはそれぞれ、「聞き込み情報」「鑑識スペシャル」のカードを渡す。  
解答が間違っていたら返す。この解答は、何回出してもよいことにする。
- ⑧真犯人がわかった班は、解答用紙を提出する。これは、1回しか出せないことにする。
- ⑨時間(約30分)になったら、終了の合図をする。
- ⑩「振り返り用紙」を配り、各自に記入させる。誰のどんな言動が良かったのか、それぞれの班員の良かったところに着目させる。
- ⑪各班で各自の良かったところやがんばったところなどを発表する。

### ◎教師が体験することの意義

「バンガロー殺人事件」は、重枝先生も私(柴田)もそれぞれの学校で実践したときには、学年合同で体育館で行いました。大人数で行うことをお勧めする活動です。

学年で行うときには、教師も担当を決めておく方がよいでしょう。全体指揮をする教師、「聞き込み情報」カードを渡す教師、「鑑識スペシャル」を渡す教師、「解答用紙」を提出する教師、各班を巡回し、やり方のわからない生徒や勘違いをしている生徒をフォローする教師など。

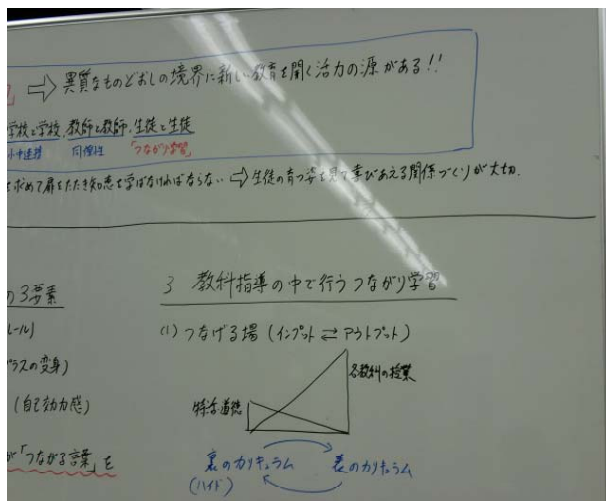
そして、事前に教師自身が、この活動を体験しておくことをお勧めします。私は事前に家で家族としてみました。もちろん、学年教師で体験してもいいですし、ぜひ、風土会に参加して体験してほしいと思います。実際に自分がしておくこと、不安なく余裕をもって活動を進めることができます。また、みんなで情報(意見)を出し合って答えが出ていく楽しさや達成感等、この活動の良さを、実感をもって伝えることができます。

今回の風土会でも、見ていて微笑ましいほど、大の大人が夢中になって活動していました。大人でも夢中になるのですから、子どもならなおさらです。

ただ、大人でも子どもでも、やはり早く解答にたどり着くチームは、チームワークの良いグループです。グループの中に一人でも、のれない人(やる気のない人)がいると、解答はみつきりません。そこが、難しいところであり、だからこそ、「協力」が必要だということが実感できるのです。

ポイントは、お互いの情報を正確に伝え合い、その情報を「つなぐ力」が必要だということです。そこには必然的に、リーダーシップをとる人や、リーダーを支えるフォロワー的存在、場を和ませるムードメーカー的存在や、情報を整理する存在など、さまざまな力の結集が必要となります。相手意識を強くもち、自分の持ち味を生かした役割を、各自が意識的に担うことができますと、スムーズに解答にたどり着くのです。

そのことを「実感」させるために、この活動を行います。「あー、楽しかった!!」で終わらないように、教師の意図的な働きかけが重要です。教師が意図的に働きかけるためには、事前に教師が体験しておくことが大切なのです。



☆ 今回のキーワード ☆

- 異質をつなぐ力：異質なもののどおしの境界に新しい教育を開く活力の源がある
- つながるための3要素：安心感・楽しい体験（プラスの変身）・認められる体験（自己効力感）
- P（プラン）・D（してみる）・S（スタディ＝学習する）・A（改善）
- つながりの3段階「つながりに気付く」「つながりに向き合う」「つながりを求める」
- 表のカリキュラムと裏のカリキュラム（ハイドカリキュラム）
- 脱・一斉指導



♪学習会に参加された先生方の感想♪（参加人数 16名）

- ・今までは、子ども同士のつながりの弱さをいかに結ぶかということを考えることが多かったのですが、今は、子ども同士はもちろんですが、いかに教師同士をつなぐかということが課題です。  
教師がつながらない学校は、子どもの悲鳴が聞こえてきそうです。でも、学習会に参加して、「やっぱり、そうだよ」と思うことで、明日の元気が湧いてきます。
- ・初めて参加しました。（小学校の先生です！）  
自分のクラスで活かせる技術・知識・方法等を学ぶことができ、価値のある時間を過ごすことができました。体験活動のグループワークでは、一番に終わるほどまとまりがあり、楽しかったです。
- ・「異質をつなぐ力」が求められていることに納得しました。以前からも教育の力を生み出すものは、教師・生徒・保護者・卒業生・地域との連携と考えていましたので、今回、再確認できました。ですが、いかにして「つなぐ」かについては、ハッとさせられる発想ばかりでした。今後の活動に生かしていきたいと思います。（高校の先生も参加されました）
- ・何をすることも、何のためにするのか、どう育ってほしいのかを「発信」していくことが大切だと思いました。  
今日、バンガロー殺人事件が解決できなくて焦りましたが、みんなで情報（意見）を出し合って答えが出ていく楽しさを存分に味わうことができました。こういう体験も成功体験として、積み重なっていくと、子どもの自己効力感も高まりそうです。
- ・「つながり」というキーワードは、本当に大切だと思いました。子ども同士が信頼し合ってつながり合って、一緒に学ぶ教室にしたいです。  
今日、体験させていただいた「バンガロー殺人事件」も、楽しく活動しながら、仲を深められるもので、ぜひ、実際に子ども達にさせてみたいと思いました。今までは、単発的にしかできていないので、計画的に取り入れていきたいと思います。
- ・「つなぐ」「つながり」という言葉に含まれた意味を深く考えることができました。「異質をつなぐ」ということは、成長すること、させることにとても大切で、それを意図的に仕組むことが必要だと感じました。また、生徒に話を聴かせることも仕組むことで、レベルアップさせることができ、信頼やつながりになることも納得できました。
- ・GWTは、まず自分でやってみることが何より大切です。実感がないと良さや伝えたいことがあいまいになってしまいます。生徒に話すこと（伝えたいこと）のベースには、実感が何より大切だということを再確認しました。  
さらに、『シェアリングを充分にすること』  
『相手意識を強くもたせ、レジリエンスを育む』  
この2つをベースとして、GWT、日々の授業にのぞむことを、今日改めて、インプットしました。PDSAの「S」をしたので、来週、「A」にトライします。
- ・初めて参加しました。なるほど、そうか！と思う話をたくさん聞くことができ、本当に参加してよかったと思いました。教科の中でのつながり学習を、もっと重視したいと思いました。

## ♪ 「実践発表」(永光先生 東光中学校) への感想や自分の実践について ♪

- ・子ども達の様子を、しっかり把握されているように感じました。ブラインドデート的なことと合体させて、私もやってみようと思いました。

### ※ブラインドデート：自己紹介をクイズ形式で行うエクササイズ

集団の中での不安や緊張を和らげ、クラスの中での所属感をもたせる。  
周知の関係であっても、新たな気付きを得られ、人間関係が活性化する。  
同時に、クラスの支持的風土づくりをめざす。

- ・「お悩み相談」というアイデアは、他者を認めることやクラスの空気づくりに活かせると思います。参考になりました。  
また、「お悩み相談」をするためには、子どもが先生と、先生が子どもとしっかりつながり、お互いが本音で話し合えるようにしたいと思いました。
- ・「お悩み相談室」が、すぐにできる教室の雰囲気ですばらしいと思いました。それだけ、日頃からの積み重ねがあるのだと思います。私も計画的に継続して、取り入れていきたいです。
- ・永光先生の実践報告も重枝先生の話も、とても新鮮に感じられました。自分の学校では、学習の場・研修の場などが少ないので、先生方の教育実践が聞けて勉強になりました。
- ・意見を言い合える風土づくりの大切さがよくわかります。今年はなかなか、それが作れないままで終わったので、来年のクラスではぜひ、そんな風土を作りたいと思います。
- ・どんなことでもアウトプット!!!  
PDSAの「D」と「A」を、どんどんアウトプットされていることが素晴らしいと思います。
- ・子どもの実態を見て、教材を選ぶことがなかなかできていないので、子どもに合ったものを取り入れていきたいと思います。
- ・実態を話し合えたり、共通理解ができれば、どんどん永光先生のように、できていけると思いました。
- ・どんなクラスにしたいか・・・→「風土をつくる」ために、  
子どものどんな意見も、皆それぞれに良いという雰囲気づくりをしたいと思います。その方向の空気が出てきて、消えての繰り返しですが、これからも頑張ろうと思いました。先生からの一言が、子どもにとって大きいんだ!!
- ・風土会で学んだことを、自分の学校でオリジナルの形にして実践されているのは、素晴らしいことであると思います。大変、勉強になりました。
- ・永光先生のお話の中で、クラスの半分以上の生徒が、「自分を嫌いだ」と思っているという事実、改めて愕然としました。自己肯定感や自尊感情が低いといわれている、日本の子どもたちですが、自分の目の前の子どもたちが、そうであるという事実の前で、教師として、何かできることがあるのではないかと切実に思います。  
中学生は、親や教師よりも、友達を求め、良くも悪くも友達から大きな影響を受ける時期です。そのうえ、今の子どもたちは、コミュニケーション力が低く、なかなか自分たちで良好な人間関係を築けません。同質の、閉じられた人間関係しか結べません。その中でも、本音を隠した表面的な関係しか結べていない場合も多々あります。だからこそ、教師に「異質をつなぐ力」が求められているのです。そのノウハウを学び、アウトプットしていきたいです。